

木版画資料にみるピョートル1世による「ヨーロッパ化改革」の実像

解説 田中 良英

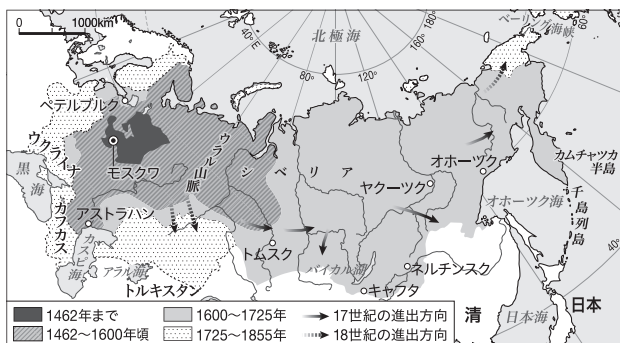


図1 ひげを切られるロシア貴族 図2 ロシアの領土拡大

17世紀末までのロシア社会では、イヴァン4世(雷帝、在位1533~84)期の1551年に制定された法典、通称『百章』の第40章冒頭で「正教徒はすべて、顎ひげを剃り口ひげを切ることを禁じられている」と明記されているように、ひげを蓄えることがロシア正教徒男性の正しいあり方とみなされてきた。この伝統的な風習に異をとねたのがピョートル1世(大帝、在位1682~1725)である。総勢200名以上の人員からなる「大使節団」をヨーロッパに派遣し、自身も1697~98年にそれに帯同していたピョートルは、ロシア帰国後、廷臣たちのひげをみずから剃り落とす挙に出る。また、ひげを残すことを希望する者にはその代償として税を課し、その支払い証明として「顎ひげ章」をめだつかたちで着用することを求めた。この「ひげ剃り」の原則は、1705年初めに発布された法令により改めて詳細なかたちで確認される。

図1の資料は、こうしたピョートル1世による規定を理由に、強制的にひげを切られる貴族男性の姿を描いた図版とされる(『詳説世界史(世探704)』p.196に掲載)。ヨーロッパに範を求めロシアの伝統からの離反を希求したピョートルによる

改革を象徴する図版として引用されることが多い。そのような理解自体はおおむね誤ってはいないが、資料の内的・外的情報や時代背景などの情報をさらに考え合わせることで、ロシア史に関する視角を様々におぎなうことが可能になるものとする。

まず資料の性格についてだが、これはロシア語で「ルボーク」と呼ばれる木版画の一例である。このルボークは当該の図版にも共通するように、写実的な絵画というよりは、単調な描線・色調で構成され、さらに簡単な説明のためのテキストを含む形態が一般であった。17世紀半ばに制作・販売が始まり、娯楽や教育、情報提供を目的に多様な題材が取り上げられたとされる。社会各層に流布したが、その主たる享受者はやはり民衆であったと考えられる。17~18世紀のロシアは、同時期のヨーロッパ諸国とも共通するように、住民が固有の権利・義務により区分される身分制社会の構造を呈していた。ロシアの歴史家ボリス=ミローフによると、1719年の時点で全人口に占める割合は貴族と聖職者がそれぞれ2%前後、都市民が4%に対し、農民は圧倒的多数の90%弱である。ルボークはそのシンボリックな図柄ゆえに、これら

識字能力に乏しい農民層にも理解可能なものとして、広範な社会的影響力を有したと推測される。

こうした近世ロシアの身分制社会としての性格は、実のところピョートル1世の「ひげ剃り」令にも反映されている。先に触れた1705年の法令の冒頭では、当該規定の対象者として「モスクワと全都市」、そこに居住する廷臣、各種勤務者、商人ら都市民があげられている。つまり人口の大多数を占める農民は対象外であって、ひげをおび続ける「農民たちからは日々、彼らが都市に入るとき、出るとき」、すなわち都市への立ち入りに際し、他身分と比べても少額の通行料の徴収が指示されるなど、あくまで一時的な適用の色彩が強かった。このような差別化は、1701年にやはりピョートル1世が公布した「ドイツ服の着用に関する勅令」にも共通している(ちなみに当時のロシアでは「ロシア語を話せない者」の意味で「ドイツ人」の語が用いられており、総じてヨーロッパ人と同義となっていた)。ロシアの伝統的な装束のかわりに、「ドイツ風の」衣服や靴、鞍の使用を命じた同法令では、聖職者と「耕作に従事する農民」とを除いた命令である点がやはり文中に明示されている。

このように付随的な資料、そしてその具体的内容にまで目を配ることにより、ピョートル1世の改革に関する評価もまた、多様なかたちでおこなうことが可能となろう。ピョートルの治世において、軍隊や行政機構の主たる担い手である貴族層や勤務者層など、いわばエリート層に対しては、こうした外観や習俗など各種の変化が、ときに罰金や罰則を示唆するかたちで強制的に要求されたことは確かであり、実際に些細な違反でも厳格に処分された事例も記録されている。このようなピョートルの施策については、彼を外国人とすりかえられた偽者であるとか、「反キリスト者」であるとかととらえ、同時代には批判的な見方も強かったとされる。ただし先述の法令をみるに、そうした改革政策は全人口の1割にも満たない一部エリ

ートに向けられたものであり、ピョートル1世はロシア社会の基層までを拙速にかえることは想定しておらず、むしろかえられるとも考えていなかったように思われる。その意味で、後世「玉座の革命家」とも称されるピョートルながら、理想主義者というより現実主義者としての側面を見出すこともできよう。

とはいえ、ピョートル以降、18世紀の皇帝政府が継承したヨーロッパ化政策が、ロシアの強国化に一定の役割を果たし、図2「ロシアの領土拡大」の地図(『詳説世界史』p.196)にも示されるように、とりわけエカチェリーナ2世(在位1762~96)の治世におけるクリミア半島など黒海沿岸やポーランド東部への領域拡張の要因となった点も否定できない。他方、現在のロシア=ウクライナ戦争で焦点の1つとなっているクリミアは、このようにあくまで18世紀以降の急速な領土拡大の過程で併合された地域にすぎないともいえる。

また、当該のルポーク内のテキストにも改めて着目してみると、高等学校教科書などにはあまり登場しないものの、ロシア史上の重要な要素にたどり着くことができる。絵の右上の部分には「理髪師は分離派教徒の顎ひげを切ることを望んでいる」と記されている。この分離派は、17世紀後半のロシア正教会における改革運動に反発して、旧来の宗教儀礼の遵守を主張した者たち(そのため「古儀式派」「旧儀派」とも称される)に端を発し、現在に至るまでロシアの内外に存続するとされる。

15世紀半ば、東方正教会の総本山のあるコンスタンティノーブルがオスマン帝国の手に落ちて以降、ロシア正教会と他地域の正教会との乖離が拡大してきたが、ピョートル1世の父アレクセイ(在位1645~76)の治世の1652年にロシア正教会の頂点たるモスクワ総主教に就位したニーコン(1605~81)は、ロシア国外の宗教儀礼を改めて採用することで、ロシア正教会の国際化を試みた。この動きは、先にも記したように、ロシア的儀礼にこ

そ正統性を認める聖職者や信徒たちから批判されたが、政府もまたニーコンの改革の方向性を認めたことによって、彼らは異端として弾圧の対象となり、白海沿岸のソロヴェツキー修道院に集った一団は政府軍への長期の軍事的抵抗を展開したりもしている。このようにロシア正教の伝統を重視した分離派において、ひげに執着する傾向は他者より強かったものと推測される。ルボークに描写されているのはおそらく貴族男性であり、エリートの中にも19世紀末の歴史画の題材となったモローゾヴァ公爵夫人のような著名な分離派信徒も存在したものの、むしろ民衆においてこそ旧来の各種習俗へのこだわりは大きかっただろう。

なお、この分離派発生の構図に示唆されるように、ロシアにおける国際化の志向と伝統社会との相克は、必ずしもピョートル1世期にはじめて生じたわけではない。とりわけヨーロッパ化について、「ロシアの領土拡大」図にも示される、17世紀後半のウクライナ東部併合の歴史的意義に注目する視点も存在する。ロシア国家の起源は、9世紀のキエフ公国建設に求められることが多いが、11世紀中葉における国内の分裂以降、さらに13世紀前半におけるモンゴル軍の攻勢により、都市キエフ(キーウ)が打撃を受けると、南ロシアと北東ロシアとの関係は一層希薄なものになった。いわゆる「タタールのくびき」の下、北東ロシアでモスクワ公国がしだいに台頭する一方、ウクライナを含む南ロシアについては、リトアニア大公国、ポーランド王国、そしてジョチ=ウルス(キプチャク=ハン国)の後継国家の1つクリミア=ハン国など、周囲の大国がそれぞれに支配力を強めた。その結果、東ヨーロッパでは例外的にカトリック国家であり、ローマ教会との人材交流のあったポーランドの影響により、17世紀までにウクライナには西ヨーロッパの文化的影響が浸透することになる。この点に留意すれば、ウクライナはモスクワとは数世紀間、異なる経路を歩んだといえる。

イヴァン3世(在位1462~1505)期以降、バルト海沿岸地域への進出を試みたロシアは、スウェーデンやポーランドと競合し、王朝の断絶にともなう混乱もあって、17世紀初めにはこれら両国に領土の一部を占拠されるなど、むしろ劣勢に立たされていた。このような西方とのパワー=バランスもあり、「ロシアの領土拡大」図でも、17世紀までのロシアの進出は総じて東方に向いていることがわかる(ちなみにこの進出の結果、ロシアはユーラシア東部の大国、清と接触するようになり、17世紀末に双方間の国境画定の必要が生じる)。

ただし同世紀半ばよりポーランドの内政改革が議会の機能不全により停滞するとともに、ポーランド支配をきらったウクライナのカザーク(コサック)勢力がロシアに接近したこともあり、ようやくロシアはポーランドに対抗しうる状況となる。1654年から続いた両国間の戦争は、最終的に67年のアンドルソヴォ条約締結によって終結し、ロシアはキエフを含むウクライナ東部を獲得した。この結果、モヒラ=アカデミーなどキエフの学術機関出身の人材の影響力がモスクワでも強まる。

このほかにも、16世紀前半の宗教改革以降、ヨーロッパ諸地域で宗派対立が顕在化したのを契機に、生活や信仰の困難を経験した者たちの移動も加速した。なかには最終的にロシアへの移動と定住を選択する者もあり、彼らの居住地として1652年、モスクワ郊外に「新ドイツ人村」が建設されている。このように西方からの文化的影響が17世紀後半、ピョートル1世期以前から、「宮廷劇場」などとくに宮廷近辺におよぼされていた点も強調されるようになっており、ピョートルの改革の先駆性については以前に比べ否定的な評価が強い。

ロシア=ウクライナ戦争の開始以降、ロシア異質論が強まっているからこそ、改めてロシア史理解の深化、同時代的文脈への位置づけの視角が求められているように感じられる。

(たなか・よしひで/宮城教育大学教授)